

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 相澤 康隆

アリストテレスのアクラシア論は、様々な問題を孕んでいるために、未だ決定的な解釈が定まっていない。本論文は最善の解釈を提示する試みである。

第一章では、アクラシア(自制心のなさ)に関する様々な一般的見解についてのアリストテレスの考え方が解明される。

第二章では、自制心を欠く行為を説明する四つの議論について、研究者たちの様々な解釈を斟酌しつつ、筆者の解釈が詳しく論じられる。四つの議論は、自制心を欠く行為をする人がその行為を「なすべきでない知っている」ということの意味を明確にすることによって自制心を欠く行為のメカニズムを説明するものである。第一議論は、知の所有(記憶)と使用を区別して、自制できない人は「使用していない」という意味で「知っていない」と論じ、第二議論は、「知っていない」対象は実践的推論の小前提だと論じ、第三議論は、知を使用しているように見えるが実は使用していない場合があると論じている。第四議論は自制心を欠く行為のメカニズムを説明するもので、最も問題の多い議論であるが、筆者は、これまで提示された様々な解釈を考慮に入れた上で、自制心を欠く行為を妨げる推論の小前提に意識を向けることが欲望によって妨げられるという解釈を提示している。

第三章では、筆者はまず伝統的解釈の二つの難点を指摘する。一つは、自制心を欠く行為を禁ずる結論を導き出したにもかかわらずそれを守り通せないという事態を説明できない点、一つは、自制心を欠く行為には葛藤が伴うという事態を説明できない点である。次に筆者は、これらの難点を克服する二つの有力な解釈としてチャールズとダールの解釈を紹介してその問題点を指摘し、筆者自身の解釈として、自制心を欠く行為をする人も、いったんはその行為を禁ずる結論を出すか、葛藤の末、欲望に負けて小前提に意識を向けることができなくなるがゆえに、結論にも意識を向けることができなくなる、という解釈を提示する。

「実践的推論の結論は行為である」というアリストテレスの主張に関しては、筆者は、実践的推論においてはまず結論命題が導き出され、それが行為へと必然的につながると解釈し、必然性に関しては、欲求を行為の原因とするアリストテレスの考え方に基づいて、「欲求が行為を必然的に生じさせる」と説明する。

最後に筆者は、アリストテレスが第三議論において、自制できない人は小前提を「語っているが知として身についていない」と述べている点について、個別的な「その場限りの判断」である小前提について知として身についているとかいないと言うことは意味をなさないと批判し、この問題点はアリストテレスの議論の重大な難点となっていると指摘している。

筆者の解釈は従来の解釈を十分に視野に入れた上で、それらの問題点を可能な限り取り除いた点に大いに価値が認められる。よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判定する。